# 満洲国下のチューリン商会における多民族共生

藤原　克美

## 1．はじめに

ロシアの鉄道建設を端緒とする都市ハルビンは、多民族の集まる国際都市として栄えた。

満洲研究においてしばしば指摘されるのは、民族、階級、性別などの格差が重なり、複雑で重層的な関係が生まれていたということである。地理的状況についていえば、都市と農村の格差は極めて大きく、新京、奉天、ハルビンなどの都市間にも大きな違いがあった。さらに、都市住民を見れば、大きく分けてもエリート、中産階級、貧困層といった階層があった。民族的には、実態として、日本人、朝鮮人、中国人（本稿では漢人、満人を指す）の間には大きな待遇差があり、日本人の間でさえ、内地人、外地人といった「生まれ」による差別や偏見が存在した。このような各カテゴリーの序列が、満洲国の生活の中で重層的に交差していた様子を、先行研究は様々な角度から描いている[1)]。

しかし、民族を含む様々なグループの研究のなかでも、ロシア人が考慮されることはそれほど多くはない。確かに、満洲国において相対的にロシア人が多く居住していたハルビンでも、人口の大半は中国人である[2)]。しかし、「帝国日本」の空間においては、日本人による朝鮮人、中国人の支配という植民地的政治状況とともに、多くの点で西欧文明の吸収と不可分の「近代化」が進行していた。そうだとすれば、日本人にとって「西欧」の一部であったロシア人の存在は、満洲国における民族関係において特殊な意味合いを持っていたと考えられる。

1）一例として、［早川、李、江上、加藤編2007］、［沈潔2001］など。

2）1938年10月には中国人82.4%、日本人6.1%、白系露人5.4%、ソビエト市民1%であった［藤原2012:155］。原資料はЕжемесячный экономический журнал Северной Маньчжурии, №1, январь 1939, с.17.

そこで本稿では、きわめて限定的な事例ではあるが、満洲国下の多民族共生を、ハルビンのロシア人を中心として検討する。

さらに、この問題へのアプローチとして、ロシア系企業「チューリン商会」の資料を利用する。「チューリン商会」は百貨店経営を中心とする複合企業であったが、当時は百貨店がダイナミックな発展を遂げており、「現代資本主義が大衆の欲望を日常的に誘発し、動員していく最大の文化装置」［吉見 2016：120］として都市の消費市場の中心に位置していた[3)]。また、「チューリン商会」の資料からは、顧客（消費者）と従業員（労働者）の二つの側面から、民族の共生を検討することができるというメリットがある。

## 2．チューリン百貨店

チューリン百貨店は 1867 年に合名会社として中国との国境にあるシベリアの都市ヴラゴヴェシチェンスクで設立され、1900 年にハルビンに進出した（1899 年という説もある）、ロシア起源の企業である。設立者のイヴァン・ヤコヴレヴィチ・チューリン（Иван Яковлевич ЧУРИН , 1834-1895）は、その名前からわかるようにユダヤ系であるが、ハルビン進出時には既に他界しており、その経営を引き継いだアレクサンドル・カシヤノフはユダヤ系ではない。

ロシア革命が勃発した 1917 年にはカシヤノフはモスクワにいたが、1922 年にハルビンに亡命している。1924 年にアレクサンドルが他界した後は、息子のニコライが経営の中心を担った。ハルビンでの中国の自治権回収にともない、1928 年に合名会社「チューリン商会（秋林洋行）」として中国で登録し、百貨店事業を中心に活動した。

しかし、1930 年ごろには香港上海銀行に対して巨額の負債を抱え、所有者は 1931 年にこの銀行に経営権を譲渡した。最終的に 1936 年 11

3）日本では、百貨店は1905年に三越のデパートメント・ストア宣言以降に急速に発展し、昭和初期には三越、大丸、高島屋、松坂屋などの大規模店が存在している。

月に企業の売却が完了し、翌 1937 年に株式会社「秋林洋行」となる。1941 年の「満洲国における敵産等処置に関する件」により、一時的に経営は満洲国に移行したが[4]、株式は香港上海銀行に保管されており、戦後 1945 年にこの株のソ連への売却によって所有の移転が完了している[5]。したがって、実際には満洲国時代のチューリン商会はこのイギリスの銀行の所有であった。

香港上海銀行はドイツ人フュッテラーを経営者に任命したが、このフュッテラーはドイツと日本の二重スパイであったと言われる人物で［井村 2009:9］、その活動には日本の特務機関が深くかかわることになった。

以上から、「チューリン商会」そのものが、多くの民族の利害が絡む「多民族性」を備えていたと言える。しかし、のちに見るように顧客と従業員の中心はロシア人で、当局を含む多くのハルビン居住者にとっては、「ロシア系」企業であったのであり、本稿でもロシア系企業として扱う。また、会社名も「チューリン商会」、「チューリン洋行」、「秋林洋行」など時期によって異なるが、ここでは簡単に「チューリン」と呼ぼう。

この会社の一つの特徴は、百貨店事業にとどまらない多角経営であったことである。商会としては自前の塗料・ラッカー工場、ウォッカ工場などがあり、農機具販売部門、自動車修理工場、ワインセラーなども有していた[6]。

ハルビン市内には大直街に 2 階建の本店が、キタイスカヤに長年「パッサージュ」と呼ばれた百貨店があり、そのほか馬家溝にも小さな店舗があった。ハルビン以外にも、新京、奉天、大連、四平街、ハイラル、寛城子、吉林、チチハルなどに支店を有していた。

---

4）「取敢えず」として役員の一人である高木繁に経営は任された。高木氏は1936年10月に関東軍嘱託となっている［РГАЭ РФ. Ф.1070. Оп.1.Д.66.Л.43］。

5）形式的には戦後に、銀行が所有していた株がハルビン支店のオストレンコを通じてソ連の「ダリヴネシュトランス」に売却され、1945年11月29日の臨時株主総会で所有の移転が確認されている［РГАЭ РФ. Ф.1070. Оп.1.Д.59. Л.338-345］。

6）ソーセージ工場、煙草工場は1936~1938年の間に閉鎖された［藤原 2018:88］。

### 3．ハルビンの民族構成

ここでは、満洲国の多民族共生を考えるうえで、留意しなければならない点をまとめておこう。

まず、満洲国にとっての問題の一つは、国籍法が存在しなかったことである。そこには、日本国籍を失いたくない日本人の都合が反映されていたが、現実問題としては住民の身分関係を明らかにする必要があるため、暫定的には「本国人」や「満洲国人」という用語が広く使われていた。

次に、中国東北部には、清国を支配した満洲人が居住し、そこに漢民族が流入することになるが、日本人も、ロシア人も、外見によって彼らを見分けることができなかった。そのため、日本の資料およびロシアの資料のほとんどでは、「満人」、「中国人」という言葉が正確に使用されていたとは考えられない。当時の人口構成からすると、その多くは既に漢民族であったと考えられる。

ロシア人については、特に、革命後にロシア帝国から逃れてきた人々は白系（亡命）ロシア人と呼ばれ、従来から無国籍であった。実際には民族的には多様な人々が含まれるが、本稿では旧ロシア帝国臣民をまとめて白系ロシア人と呼ぶ。1924 年に中東鉄道におけるソビエトの利権が確定すると、鉄道関係者をはじめ多くの「ソビエト国籍者」がハルビンに派遣された。ハルビンには、ソ連国籍者と白系ロシア人が拮抗しながら共存していたことが大きな特徴であった［クロトヴァ 2012］。

ハルビンのロシア人コロニーの最盛期は 1920 年代であったと言われる。その人口は 1922 年に 15 万 5402 人、1925 年に 9 万 2825 人を記録した後、1920 年代後半は 5 万 4000 ～ 6 万 8000 人程度で落ち着く。白系ロシア人とソビエト国籍者のバランスを見ると、1929 年にはソビエト市民が 26,759 人、亡命者が 30,362 人で双方の数に大きな開きはない。しかし、1932 年の満洲国成立以降、日本の支配を嫌ったロシア人は第三国へ亡命した。さらに 1935 年に中東鉄道が日本に売却されると、多くのロシア人が本国へ帰国する。その結果、1935 年 10 月には、ソビエト市民

が 8050 人、帰化人は 4316 人、無国籍者が 3 万 624 人となり、その後もさらにロシア人人口は減少を続け、1937 ～ 38 年の無国籍者の数は 2 万 5000 ～ 2 万 6000 人程度であった［地方司社会科 1937：79-80］。

多くの資料では、白系ロシア人は外国人としてカウントされ、その内訳として、上述のように国籍法のない満洲国においては正確な表現ではないが、中国籍を持つ「帰化人」と「無国籍者」の用語が一般的に用いられている。

その一方で、1934 年 12 月に設立された「白系露人事務局」[7] は、登録制で会費を徴収するシステムではあったものの、満洲国の施策を亡命ロシア人に伝え、亡命ロシア人の要求を拾い上げる「行政機関」としての役割を担っていた［アウリレネ 2009:27］。満洲国が提唱した五族協和の中に、例外的にロシア人が含まれることもあった［生田 2009:46］。

## 4．チューリンの従業員

今回利用する資料は、「チューリン」に関するアルヒーフ（ロシア国立経済文書館所蔵、フォンド No.1070）の従業員リストである。筆者はそこから、1928 年、1936 年と 1940 年の従業員に関する情報を入手した。従業員に関する資料は、民族的な分類や空間的範囲、雇用形態（常勤、日雇い、嘱託など）等の区分がそれぞれ異なっていたり、不明な場合があるため、正確な比較は困難だが、700 人以上の従業員についての、年齢、出身地、国籍などが記載されており、貴重な資料である。そこで以下では、民族的な特徴を中心に、年齢や出身地もあわせて時系列的な変化を見ていこう。

### 4－1．1928 年、1931 年

1928 年 5 月の資料では［РГАЭ РФ . Ф .1070. Оп .1. Д .4］、従業員は本店とキタイスカヤをあわせて 444 人であり、それとは別に中国人の奉

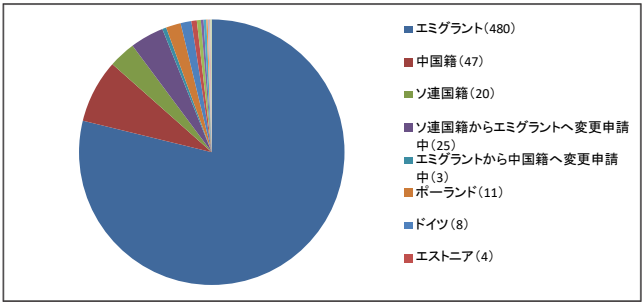
7）1943年11月の「白系露人輔導委員会」への改組は、自治的な組織から、国の補助機関への変更を意味した。

公人と労働者が 22 人いた。企業業績の悪化にともない、1931 年 3 月には従業員は合計 408 人と若干減少している。民族的に純粋な中国人かどうかは不明だが、そのうち 26 人（6.4%）が中国風の名前を持っていた［РГАЭ РФ . Ф .1070. Оп .2. Д .12.］。

### 4 － 2．1936 年

1936 年には 620 人の従業員がリストに掲載されているが、そこに記載されているのはヨーロッパ人のみである。そのうち、11 人の職場は実際にはハルビン市街であった。残りの 609 人を国籍別に見ると（図 1）、78.8% の 480 人がエミグラント、中国籍が 7.7％の 47 人であった。更にソ連国籍からエミグラントへの変更を申請中のものが 25 人、ソ連国籍が 20 人いた。エミグラントから中国籍への変更を申請中のものも 3 人ある。残りは、ポーランド人 11 人、ドイツ人 8 人、エストニア人 4 人、ギリシア人 3 人、アメリカ人とイギリス人がそれぞれ 2 人、ラトビア人、アルバニア人、オーストリア人、ハンガリー人が各 1 人であった。このように、多くはないが、ロシア人の国籍にはソ連→エミグラント、エミグラント→中国など流動性があること、ロシア人以外の民族も含まれていたことがわかる。1933 年より前から働いていた従業員は約 29% であった。

図 1　1936 年の国籍別従業員数




出所：РГАЭ РФ . Ф .1070. Оп .1. Д .26. より筆者作成。

ソ連国籍の住民がエミグラントへの変更を求めた背景には、1935 年の中東鉄道売却以降ソビエト市民が激減するなかで、実質的には日本の支配下にある満洲国で安定的な生活を確保したいという意図があったと思われる。実際、1935 年に日本の特務機関と深い関係にあったフュッテラーが経営の実権を握ると、ソ連国籍の従業員に対する圧力がかかる。例えば、関東軍とのやり取りのなかで（РГАЭ РФ . Ф .1070. Оп .1. Д .46）、1936 年 4 月 16 日の 5 人をはじめ、4 月 16 日～ 22 日までの一週間で 11 人を解雇したことが報告されている。ただし、1936 年の時点でソ連国籍であった 20 人が、その後すべてチューリン商会を去った訳ではなく、3 名の名前が 1940 年 6 月 1 日のリストにも残されている。うち 2 人の国籍は 1940 年にはエミグラントに変更されており、ソ連国籍の離脱を条件に雇用されたと思われる。1 人は国籍の記載がない。

表 1 は、別の資料を基に作成した 1936 年のハルビン市内の従業員の構成である。表 1 の正社員が 726 人、上述資料でヨーロッパ系従業員が 609 人であるから、厳密には比較できないものの 8 割程度がロシア人であったと推察される。すなわち、1930 年代には従業員の増加と入れ替えがあったものの、民族構成には大きな変化はなく、圧倒的多数は常にロシア人であった。

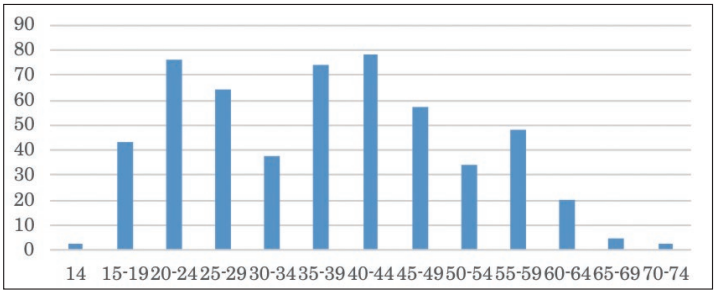
ついでながら、チューリン百貨店で若いロシア人女性に接客を受けたことを記憶している日本人は多いが、実際には従業員の 8 割以上が男性であったこともわかる。

表 1　チューリン百貨店の従業員（1936 年 2 月 18 日現在）

| | 正社員 | | | 日雇い社員 | | | 出来高契約社員 | | | 計 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 男性 | 女性 | 計 | 男性 | 女性 | 計 | 男性 | 女性 | 計 | 男性 | 女性 | 計 |
| 本店 | 427 | 90 | 517 | 125 | 8 | 133 | 145 | - | 145 | 697 | 98 | 795 |
| (%) | 82.6 | 17.4 | 100 | 94.0 | 0.6 | 100 | 100 | | 100 | 87.7 | 12.3 | 100 |
| キタイスカヤ | 149 | 38 | 187 | 3 | 1 | 4 | - | - | - | 152 | 39 | 191 |
| (%) | 79.7 | 20.3 | 100 | 75 | 25 | 100 | | | | 79.6 | 20.4 | 100 |
| 馬家溝 | 17 | 5 | 22 | - | - | - | - | - | - | 17 | 5 | 22 |
| (%) | 77.3 | 22.7 | 100 | | | | | | | 77.3 | 22.7 | 100 |
| 計 | 593 | 133 | 726 | 128 | 9 | 137 | 145 | - | 145 | 866 | 142 | 1008 |
| (%) | 81.7 | 18.3 | 100 | 93.4 | 6.6 | 100 | 100 | | 100 | 85.9 | 14.1 | 100 |

出所：РГАЭ Ф .1070, Оп .1, Д .67. Л .7.

図 2　本店従業員の年齢構成（1936 年）




出所：РГАЭ Ф .1070, Оп .2, Д .26. より筆者作成

次にハルビン本店で働く従業員の年齢構成を見てみよう（図 2）。それによると、40~44 才が 78 人で最も多く、次いで多いのが 20~24 才の 76 人である。最も若いのは 14 才で 2 人おり、最高は 74 才で 2 人いた。30 才未満が 186 人（34.3%）であるのに対し、35 才以上の従業員が 319 人（58.7%）と過半数を占める。平均年齢は 38 歳であった。1934 年ごろより大量の従業員を新規採用しているが、若年層ばかりではなかったことがわかる。

### 4 – 3．1940 年

1940 年の従業員リストでまず注目すべきは、1936 年のデータではヨーロッパ人としてまとめられていたロシア人と、別枠であった中国人が統合され、日本人とドイツ人がこれらとは別に掲載されていることである。

日本人とドイツ人の数は、従業員全体に占める比重としてはわずかであるが、明らかな増加が認められる。日本人は 1940 年 9 月 1 日現在で、ハルビン、チチハル、奉天、大連、ハイラル、神戸をあわせて 23 人がおり、うち 12 人が在ハルビンであった。次に、表 2 は、ドイツ民族あるいはドイツ国籍の人のリストである。ここからは、民族と国籍が必ずしも重ならないこと、一方が他方の部分集合となるわけで

もないことがわかる。ハルビンのドイツ人は民族的には 21 人で、うちドイツ国籍者が 12 人、エミグラントが 7 人、ラトビア籍、エストニア籍がそれぞれ 1 人であった。一方、民族的にはチェコ人の 2 人がドイツ国籍を持っていた。ドイツ人の人数の推移をハルビンに限定してみれば、1936 年の 8 人から、1940 年の 21 人へと大きく増えている。エミグラントの大きさからは、ロシア帝国とドイツとの深い関係が伺える。なお、1936 年の構成（図 1 に関する説明）にはドイツ人以外にも多様な民族が含まれていたが、彼らがロシア帝国臣民であったのか否かのデータは存在しない。

ドイツ人の増加の背景には、ドイツが日本と政治的に同盟関係にあったことや、経営者がドイツ人であったことがあるだろう。この表そのものが企業自身によって作成されていることからも、1940 年の段階でドイツ人に対する優遇、ないしはそれ以外の外国人に対する厳しい扱いが見られたことを示唆する。実際、このデータより少し前の 1940 年 4 月 25 日時点に、ドイツ国籍を申請中の 6 人のリストがあり、そのうち 4 人が表 2 の資料で確認できた。

表 2　1940 年のドイツ人、ドイツ国籍者のデータ

| | | 民　族 | 国　籍 | | | 民　族 | 国　籍 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | ハルビン | | | | 新疆 | | |
| 1 | Фюттерер Э.О. | ドイツ | ドイツ | 24 | Мальш А.В. | ドイツ | ドイツ |
| 2 | Роттман Г.Э | 〃 | 〃 | 25 | Вирфель Н.К. | 〃 | 〃 |
| 3 | Бергман Э.Э. | 〃 | エミグラント | | 奉天 | | |
| 4 | Рогенгаген К.А. | 〃 | ドイツ | 26 | Ратьен А. | ドイツ | ドイツ |
| 5 | Есенская Пауке О.И. | チェコ | 〃 | 27 | Плотц В.И. | 〃 | 〃 |
| 6 | Эверт В.Р. | ドイツ | 〃 | | 大連 | | |
| 7 | Голлан Ф.И. | 〃 | 〃 | 28 | Будде К.К. | ドイツ | ドイツ |
| 8 | Гартунг Н.И. | 〃 | ラトビア | | 神戸 | | |
| 9 | Новотный Я.И. | チェコ | ドイツ | 29 | Венцель Р.Ф. | ドイツ | ドイツ |
| 10 | Кунст И.А. | ドイツ | 〃 | | | | |
| 11 | Вицке Б.Е. | 〃 | エミグラント | | | | |
| 12 | Гайплер Г.Р. | 〃 | ドイツ | | | | |
| 13 | Верман Э.П. | 〃 | エストニア | | | | |
| 14 | Гейнрих Н.Т. | 〃 | エミグラント | | | | |
| 15 | Трендель Р.Ф. | 〃 | ドイツ | | | | |
| 16 | Квиринг Ф.Ф, | 〃 | エミグラント | | | | |
| 17 | Гольдау О.Ф. | 〃 | ドイツ | | | | |
| 18 | Опиц Г.Г. | 〃 | 〃 | | | | |
| 19 | Нейман А.Т. | 〃 | エミグラント | | | | |
| 20 | Вирфель А.К. | 〃 | ドイツ | | | | |
| 21 | Вильдтгрубе А.Н. | 〃 | エミグラント | | | | |
| 22 | Блодиг Г.Т. | 〃 | ドイツ | | | | |
| 23 | Фрейганг | 〃 | エミグラント | | | | |

出所：РГАЭ Ф .1070, Оп .2, Д .86. Л .134.

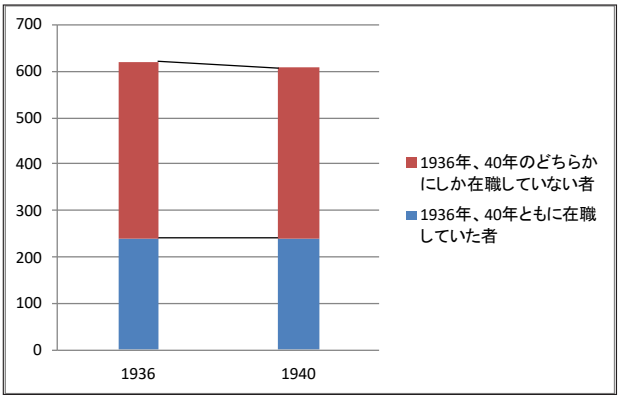
次に、ロシア人と中国人を中心とする従業員リストの検討に移ろう。そこにはハルビンの従業員として 732 人の記載があるが、国籍を特定できなかった 43 人を除くと、689 人となる。うち、エミグラントが

554 人（80.4%）、（中国人以外の）中国籍が 53 人（7.7%）、中国人が 82 人（11.9%）であった。1936 ～ 40 年の 4 年間で従業員がさらに 100 人以上増えたことになる。

興味深いのは、ロシア式の名前を使っている中国籍の人物がいたことである。それは、Ma-dy-bin Vladimir Borisovich、Ma-si-ven Voris Konstantinovich、Su-gya-hin Mikhail Nesterovich、Syui Semen Ivanovich の 4 人である。これは、両親が中国人とロシア人であったのか、中国人のロシア化か、事情は不明である。ここでは、外国人がロシア風の名前や父称を作ることは、それまでのロシア帝国臣民にも見られた現象であることを指摘しておきたい。

1936 年に登録のある従業員のうち、1940 年のリストでも名前が確認されたのは、241 人であり、それは、1936 年の従業員（620 人）の 38.9% に相当する。1940 年のロシア系従業員（エミグラントおよび中国籍）に占める割合では、39.7% である。わずか 4 年のあいだに、6 割以上が入れ替わったことがわかる（図 3）。なお、データが取得できる範囲で見ると、1940 年の平均年齢は 36 歳で若干低くはなるが、年齢構成に大きな変化はない。

図 3　1936 年および 1940 年の従業員の重複度




出所：РГАЭ Ф .1070, Оп .2, Д .26. およびРГАЭ Ф .1070, Оп .2, Д .86. より筆者作成

中国人の職種（表 3）としては、最も多いのが販売員の 20 人で、発送や配達等それに関連する職種もあった。生産や修理に係わる職種には、労働者、見習工、旋盤工、見習旋盤工、ニッケル職人、エンジニア、機械工、大工、研磨工、暖炉工などがあり、15 人がこのような仕事に従事している。クラークとオフィスワーカーで 5 人、その他、門番や掃除夫などの周辺労働者がいた。また、重要な職業の一つは通訳で、6 人がハルビンで通訳として登録されていた。このように見ると、部長や主任などの指導的ポストの中国人は皆無だが、あらゆる職場に中国人がいたと言えるだろう。

表 3　中国人の職業分類

| 職業 | 人数 | 職業 | 人数 |
|---|---|---|---|
| 販売員 | 20 | 暖炉工 | 1 |
| 通訳 | 6 | クラーク | 4 |
| 労働者 | 8 | オフィスワーカー | 1 |
| 見習工 | 6 | 配達人 | 4 |
| 旋盤工 | 1 | 発送人 | 2 |
| 見習旋盤工 | 1 | 集金人 | 1 |
| ニッケル職人 | 1 | 仲介人 | 1 |
| エンジニア | 3 | 掃除夫 | 7 |
| 機械工 | 1 | 門番 | 1 |
| 大工 | 2 | ボーイ | 3 |
| 研磨工 | 1 | 少年 | 5 |

出所：РГАЭ Ф .1070, Оп .2, Д .86.

ロシア人と中国人の出身地を見ると、100 人以上がハルビンで生まれており、最も多い。第二のグループはヴラゴヴェシチェンスク（32）、ペルミ（32）、ヴャトカ（26）、ヴラジヴォストク（21）である。12 人以上いたのが、カザン（17）、ペトログラード（16）、チタ（15）、モスクワ（14）、イルクーツク（13）、オムスク（12）といった大都市である。全体としては、シベリア鉄道沿線と国境地域を含むシベリアの出

身者が多いが、ロシアのほとんどすべての県がハルビンへ移民を送り出していた。中国人はほとんど（58 人）が、山東省の出身である。

以上は一般的な従業員の様子であるが、経営陣および所有者の民族構成は全く異なる。役員には、フュッテラーのほかに香港上海銀行の支店長（タイトラー、1941 年 11 月よりオストレンコ）と、日本人の高木繁、岩倉文祐（1937 ～ 38 年のみ）がいた。中国人役員としては、ハルビンの香港上海銀行より派遣された山壽民と、遅崇徳の 2 人である。高木と 2 人の中国人は終戦まで株主でもあった［РГАЭ РФ. Ф.1070. Оп.2. Д.66］。

## 5．顧客とサービス

### 5－1．チューリンの顧客とサービス

チューリンの事業の柱はやはり百貨店であった。そこでは顧客を、ロシア人の富裕層から、庶民へ、そして中国人と日本人へと拡大することが目標とされた。

それまでは伝統的にヨーロッパ製の高級品を扱い、日本製を扱わないことさえ宣伝していたが、従業員に対して行われた 1935 年の演説の中でフュッテラーは次のように述べている。「富裕層は多くの利益をもたらすが、現在その数は非常に少ない。もし、ロシアの貧困層との取引を進めれば、どの国でも大多数は貧困であるから、ビジネスは大きく拡大するであろうし、わが社の伝統を考えると、この点を見逃さないことは我々の義務でもある。」［РГАЭ Ф.1070, Оп.1, Д.27, Л.8.］

中国人の取り込みについては、「遅氏は我々の卸売り部の部長であるが、近い将来、組織を再編した時には、彼は中国人経営者になるだろう。…スローガンは「満洲のやり方で奉仕し、取引をせよ、満洲中で取引をせよ」である。」［РГАЭ Ф.1070, Оп.1, Д.27, Л.9.］と述べ、日本人の顧客については、「日本人とのビジネスの発展が最も重要で大きい」［РГАЭ Ф.1070, Оп.1, Д.27, Л.10.］と期待している。実際、1930 年代半ばから中国語および日本語の主要な新聞・雑誌に広告を掲載し

ている。また、日本人の場合には観光客の来店も期待して、日本人観光客が宿泊するホテルに日本語パンフレットを配布した。

このような戦略の中で、従業員の対応に変化はあったのであろうか。

ハルビンのロシア人コロニーが縮小する中で、かえってチューリンでは従業員が大幅に増え、ロシア人比率も常に 8 割程度と高い状態が維持されていた。しかし、必ずしもロシア人が優秀であるから雇用されたという訳ではない。少なくとも経営者であるフュッテラーのロシア人に対する評価はそれほど高くない。実際にフュッテラーが店舗を視察した際に、あらゆる場所が汚れ、私物が置かれているなど整理が行き届いていない状況に激怒したとのエピソードも残されている［РГАЭ Ф .1070, Оп .1, Д .49, Л .344.］。フュッテラーがロシア人の仕事ぶりに不信を抱いていたことは、ハルビンの百貨店の統括者にはゾーリッチを、神戸支店長にヴェンツェルを起用するなど、組織のトップにはドイツ人を登用したことからも読み取れよう。

外国人への対応はどうであろうか。表 4 は実際に店舗で各国の言語で対応できるスタッフのメモである。1937 ～ 1938 年ごろに行われた別のアンケートでは、回答のあった 997 人のうち、879 人が何らかの外国語を知っていると答えており、会社の評価でも 263 人の語学力は「良い」と評価されている（表 5）。店舗のみに限定されているとはいえ、表 4 に記載されている人数ははるかに少なく、実際には顧客対応できるほどのレベルではなかったと思われる。表 4 では日本語通訳者の数が比較的多く、具体的な名前が挙げられていることから、日本語対応の必要な顧客が相対的に多かったことがうかがえる。しかし、ロシア語を理解できる外国人客もいたと想定すれば、この表が顧客の民族構成を反映しているとも言うことはできない。

表 4　通訳として呼ぶことのできる従業員（店舗、1940 年）

| | 第1交替 | 第2交替 |
|---|---|---|
| ドイツ語 | | 2 |
| フランス語 | 1 | 1 |
| 英語 | 3 | 4 |
| 日本語 | エメリヤノフ | 山口 |
| | クダショフ | サヴェリエヴァ |
| | オフチンニコフ | キリケーエヴァ |
| | ルニナ | テトゥシュキナ |
| | | シャフクノフ |
| | | アイゲニン |
| 中国語 | 2 | 2（全員中国人） |
| | | |

出所：РГАЭ Ф .1070, Оп .2, Д .86, Л .137.

表 5　外国語の知識に関するアンケート（1937~38 年頃）

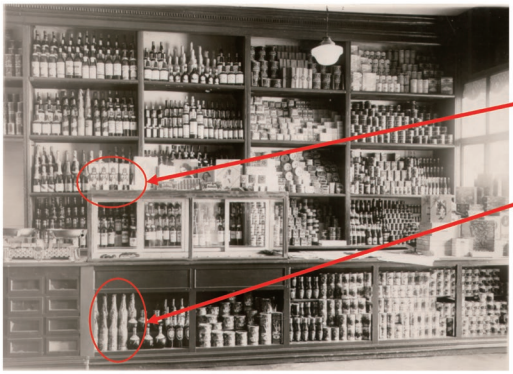
| | 良い | 平均 | 弱い | 計 |
|---|---|---|---|---|
| 英語 | 82 | 85 | 112 | 279 |
| ドイツ語 | 44 | 33 | 33 | 110 |
| フランス語 | 10 | 17 | 9 | 36 |
| 日本語 | 35 | 46 | 30 | 211 |
| 中国語 | 92 | 47 | 62 | 201 |
| 計 | 263 | 28 | 346 | 837 |

出所：РГАЭ Ф .1070, Оп .1, Д .46, Л .15.

日本人顧客との間では、商品の陳列棚と、支払い場（レジ）とが異なる欧米式に日本人が慣れないこと、掛売販売の回収率が低いこと、などのトラブルが報告されている。

他方、日本人顧客の側では、チューリン百貨店での買い物を楽しんだ様子を、様々な回想から知ることができる。ロシア人の接客から伝わる西欧的な雰囲気は、多民族都市ハルビンを代表する風物であった。日本からの輸入が始まった後も、商品の大半は西欧的なもので、純和風のアイテムは含まれていない。図 4 のカルピスのような商品が陳列されていたのは珍しいケースであろう。

図 4　チューリン百貨店の食料品売り場




出所：РГАЭ Ф.1070, Оп.1, Д.493, Л.99.

百貨店業務以外では、卸売部門の強化と公的発注への傾斜が目指された。卸売部門では海外からの輸入品や自社工場製品を地元の企業に卸していた。特に、チューリンは欧米の 50 以上の企業の満洲での代理店を務めていたため、中国系企業を含む地元企業からの注文を取りまとめて海外へ発注･輸入するという役割があった。そこで、企業は中国人従業員を補強し、卸売部門を拡大することを狙ったが、実際には 1936 年より各種商品の輸入統制が始まり、次第に縮小を余儀なくされた。

戦時色が強まるにつれ、政府･軍関係者からの発注の重要性が高まっていく。フュッテラーは関東軍とつながりを持っていたため、いくつかの共同事業も実施されたが、他の百貨店と比べると成功していたとは言えない。

### 5－2．他店との比較から

日系百貨店である登喜和百貨店では、1937 年の時点で 228 人、丸商百貨店では、1942 年に 200 人が働いていた［百貨店新聞社 2009a,2009b］。民族的な内訳は明らかにされていないが、朝鮮人、中国人、ロシア人も含まれていたことは確かである。登喜和百貨店の営業部長としてハル

ビンにわたった新谷氏によれば、「従業員は日系・満系・鮮系・白系露人などの多民族集合であり、日本語で運営するという、協和会的な精神のもとでいかねばならなかった」という［新谷 1973:121］。また、写真の 8 人の女性は丸商百貨店のロシア人店員である。ロシア人を含め日本人以外の店員は、多様な民族の顧客に対応するために必要であった。丸商百貨店は、ロシア語雑誌『アジアの光』（1939 No.60）で、「最大の日系百貨店、丸商。石頭街と地段街の角。ロシア人のお客様のためにロシア人女性の店員がいます」と宣伝している［藤原 2015:35］。

図 5　丸商百貨店のロシア人従業員

（http://forum.alexanderpalace.org/index.php?topic=7267.0 2019 年 6 月 29 日アクセス）

ただし、実際には顧客の多くは日本人であった。そして、『日本百貨店総覧』に「売場にロシヤ娘が相当立っているあたり、流石にハルビンらしい風景を添えている」とあるように、写真のようなロシア人の店員は、国際都市ハルビンの香りを楽しみたい日本人のためでもあったと考えられる［藤原 2015:35］。

中国人が設立した同記商場は、中国人街の傅家甸正陽街にあり、店員は全て中国人男性であった。日本人やロシア人などの他の民族が訪れたという話はあまり知られておらず、顧客もほとんど中国人であっ

たと考えられる。

このような状況が1930年代半ば以降のチューリンの路線にも反映された。企業としては、中国人や日本人の顧客を増やすことで生き残る道を検討したが、実際には、チューリンが登喜和百貨店や丸商百貨店と差別化できる強みはロシア的な商品・サービスの提供であった。チューリンはハルビンの比較的裕福な層を中心に、西欧的消費スタイルを提供するという役割を担った。それゆえ、たとえ客層に変化があったとしてもビジネスの中心は常にロシアであり、ロシア人の雇用が継続されていたと考えられる[8)]。

## 6．おわりに

満洲国時代のチューリン百貨店では、様々な職種で中国人労働者が働いており、日本人とドイツ人の従業員も増加した。しかし、常に約8割はロシア人であったことは、所有者や経営者の変更にもかかわらず、チューリンが事実上ロシア系企業であったという認識を支持するものである。

ロシア人についてみると、1936年頃までは、エミグラント、ソ連国籍、中国籍の人々がともに働き、このカテゴリーを移動する人々もいたことが確認された。ロシア人は生活習慣はなかなか変えなかったが、国籍はプラグマティックに選択していたといえよう。ドイツ人をはじめとする西欧人の間でも民族と国籍が必ずしも一致しないことは、ハルビン社会の民族的な混合状態を現しているだろう。

中国人の生活を見ると、彼らは主に傅家甸という中国人だけの空間に居住していた。次第にロシア人街や日本人街も彼らの生活圏に含まれるようにはなるが、他民族との交流は特に少なかったと思われる。

そのようななかで、チューリンの1940年の資料でロシア人と中国人が統合されている点は目を引くだろう。しかしチューリンでは、ロ

8）そのほか、当局との関係のなかでフュッテラーは、失業率の高いロシア人を雇用する社会的意義をアピールしていたとも考えられる［藤原2010］。

シア人と中国人が同じ職場に雇用されていても、職務の大半はロシア語によって行われていた。特に興味深いのは、所有者が香港上海銀行（英国）で、取締役として英国人と日本人、中国人が入り、ドイツ人が社長を務めるようになって以降の状況である。社内の公式文書は英語とロシア語で各 1 部ずつ作成されており、オリジナルがロシア語のことが多い。さらに百貨店部門の議事録や、社内の回覧文書はロシア語のみである。従って、このような多民族空間においてさえ、意思疎通の大半はロシア語で行われていたと考えられる。

このようにみると、チューリン内の様々な民族の「協働」はロシア語および、ロシア人中心で行われていたと結論できよう。チューリン内部は、依然としてロシア人中心の「共生社会」であった。

## 引用文献

Russian State Archives of Economics (РГАЭ)
Fond (Фонд) No. 1070.

アウリレネ・エレーナ
2009「満洲の政治システムにおける白系露人事務局―1932～1945年―」『セーヴェル』生田美智子訳、第25号、27-31、大阪：ハルビン・ウラジオストクを語る会

生田美智子
2009「多文化空間における亡命ロシア人の民族・文化的アイデンティティ―ハルビンの場合―」『セーヴェル』第25号、40 - 54、大阪：ハルビン・ウラジオストクを語る会

井村哲郎
2009「1930~1940年代のチューリン商会」『セーヴェル』第25号、5-13、大阪：ハルビン・ウラジオストクを語る会

クロトヴァM.B.
2012「北満洲における「モスクワから出張してきた」ソビエト代表者（1920-1930年代）」『セーヴェル』藤原克美訳、第28号、

66-78、大阪：ハルビン・ウラジオストクを語る会
地方司社会科
1937「北鉄譲渡後に於ける在哈露人一般動態に関する調査」『民政部調査月報』満洲行政学会、75-113、新京
新谷信哉
1973「満洲の思い出」『ハルビンの想い出』、117-122、京都：京都ハルビン会
早川紀代、李熒娘、江上幸子、加藤千香子編
2007『東アジアの国民国家形成とジェンダー』東京：青木書店
百貨店新聞社
2009a『日本百貨店総覧昭和十二年版』東京：ゆまに書房復刻版
2009b『日本百貨店総覧昭和十七年版』東京：ゆまに書房復刻版
藤原克美
2018「1930年代チューリン百貨店のロシア人」『セーヴェル』第34号、85-99、大阪：ハルビン・ウラジオストクを語る会
2015「ハルビンの消費社会と女性」生田美智子編『女たちの満洲』24-41、大阪：大阪大学出版会
2012「満洲国におけるロシア人ビジネスの衰退と人的ネットワーク」生田美智子編『満洲の中のロシア』151-176、神奈川：成文社
2009「白系露人事務局の経済機能と財政」『セーヴェル』第25号、32-39、大阪：ハルビン・ウラジオストクを語る会
吉見俊哉
2016『視覚都市の地政学－まなざしとしての近代』岩波書店